

〈原著論文〉

身体障害者スポーツ実施者からみた
〈クライアント-ボランティア〉関係に関する研究

山田力也*

**A study on the relationship between clients and volunteers
observed by physically disabled sports players**

Rikiya YAMADA*

Abstract

The purpose of this study is to clarify presence or absence of unpleasant experiences in sport volunteer activities, the contents, and the related factors in clients having sport volunteer activities for the disabled, and to elucidate the relationship between clients and volunteers by comparing these results with their social features, execution of sports, and awareness.

We carried out a social questionnaires survey in the 317 disabled subjects who played sports one day or more a month, using sport facilities for the disabled.

The main results were as follows:

1) Although the satisfaction degree as sport volunteers was high, about 40% of the volunteers had unpleasant experiences in the activities. The proportion of the subjects having unpleasant experiences tended to be higher in the subjects who had experienced sports meetings.

2) Specific contents of the unpleasant experiences were diverse, including discrepancy between expected recognition and role recognition, lack of support techniques, sensation to be regarded as being at a socially low position, arrogant attitude, and others. Especially, as for the later two aspects, appearance of discrimination awareness triggered by the activities was indicative.

3) In analysis of factors related to the sport volunteer activities, three factors were extracted, being named familiarity factor, social position factor, and support technique factor, respectively.

4) In comparison of each factor with social features, execution of sports, awareness, related items, as for familiarity factor, males, club-subscribers, persons with experiences of sports meetings tended to agree more. As for social position factor, younger persons tended to be sensitive to their social position in immediate enjoyment intention.

As future subjects, it will be necessary to investigate the relationship between clients and volunteers in more detail and to elucidate dynamism and mechanism of the process of forming the relationship between and clients sport volunteers.

Key word: disabled sports, relationship between clients and volunteers, sport volunteer

*西九州大学 健康福祉学部 社会福祉学科 Department of Social Welfare Science, Faculty of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University.

受理日：2002年7月4日

1. 緒言

総理府の「障害者白書」(2000)によれば、わが国における障害児・者^{注1)}の総数は、約576万人であり、その内訳は、身体障害児・者が約317.7万人、知的障害児・者が約41.3万人、精神障害者が約217万人となっている^{注2)}。

個人の尊厳に基礎づけられたノーマライゼーション社会の実現は、いかにして可能なのか。この問題は、障害の有無にかかわらず、われわれ人間に課せられた最重要の課題だともいえる。なかでも障害者の人権と豊かな生をいかに保障していくのか、この課題に対し、1981年、「完全参加と平等」をテーマとした国際障害者年、それに続く国連・障害者の十年の取り組みを通して、国際的にさまざまなアプローチが始められている。

我が国における障害者の社会参加の促進と生活の質の向上を通じたノーマライゼーション社会の達成にむけたさまざまな取り組みの中で、近年、スポーツや運動の有効性が注目されてきている。

たとえば、1998年の長野冬季パラリンピックや2000年のシドニー夏季パラリンピックでの日本選手の活躍は、障害者の社会参加の機会拡大にとどまらず、障害の有無を超えた人間の無限の可能性を提示し、国民全体に希望と感動を与えたと同時に、障害者の地位向上に寄与してきたものといえよう。

また、日常のスポーツ活動においても障害者スポーツは、単なるリハビリテーションの手段としてだけでなく、身体的コミュニケーション性および遊戯性に支えられた人的交流やスポーツを中心としたコミュニティ形成、身体文化としてスポーツを享受することによる生きがいの創出など、さまざまな有効性が認識されつつある。

しかしながら、その一方で、いわゆる障害者における競技者養成や日常のスポーツ活動を支援するという意味において、その必要性とは裏腹に施設の、人的、財政的なスポーツ環境の不備が顕在化しているのも事実である。現在、施設の、財政的な基盤整備が不可欠であることはいうまでもないが、指導者やボランティアなど人的支援システムの構築が急務といえよう。なかでも、ボランティアの量的確保と資質の向上が支援を求めている人(クライアント)との関係性のあり方を含め重要な課題となっている。

一般にボランティアとは、広義の社会福祉の領域で、自ら進んで、報酬を期待せずに時間や労働を提供し、社会的な目的実現に参加することを志す人として捉えられ、その特性として「自発性」、「無償性」、「公共性」があげられる^{注3)}。

総務府の「社会生活基本調査報告」(1998)によると、ボランティア活動参加率(社会奉仕活動行動者率)は25.3%で国民の4人に1人の割合を示している^{注4)}。また、経済企画庁(現内閣府)の「国民生活選好度調査」(2000)によれば、実際にボランティア活動への参加意欲を持つ人の割合は65.0%、さらにこれまでボランティア活動をしたことはないが活動への参加意欲を持っている潜在的参加希望者の割合は、国民の約3人に1人にあたる37.0%となっている^{注5)}。この数字を見てもわかるように、わが国におけるボランティア活動は、阪神・淡路大震災(1995)を経験したことや、1996年、第52回国連総会において2001年をボランティア国際年とすることを定めたことも大きく影響し、一種のブーム現象としてではなく、今では生活上一般的な活動として定着しつつある。

つぎに、スポーツにかかわるボランティア活動、いわゆるスポーツボランティア^{注6)}についてみると、内閣府(2000)の調査によれば、全体の8.5%の人が何らかのスポーツボランティアに従事しており、今後、行ってみたいという人の割合は、21.4%にのぼる^{注7)}。わが国のスポーツボランティアについて主なものをみてみると、1995年に福岡市で開催された「第18回ユニバーシアード大会1995福岡」では、約55,000名、1998年長野県で開催された「第18回冬季オリンピック」では、34,000名以上がそれぞれの大会を支えた。さらにスポーツ指導に関するボランティアをみても、スポーツ指導者の大半がボランティアであることを勘案すれば、今後、我が国のスポーツの支援を考えていく場合、上述したようにスポーツボランティアの量的確保と資質の向上が急務である。

なかでも日常の障害者スポーツを支えるボランティアにおいては、それぞれ個人によって障害のタイプと程度が異なること、障害による心的外傷を有する人が少なからずいること等を勘案すれば、人間関係の醸成能力を基盤としつつ、障害のタイプと程度に応じた支援技術、態度形成が求められることになる。この意味で、障害者スポーツにおけるボランティアの態度、支

援技術、対人関係のあり方に対するさまざまなアプローチが求められているといえよう。またこのアプローチは、障害者スポーツの支援がいわば個別的、限界的状況を含むことから、障害者スポーツのあり方のみならず、スポーツボランティア、さらにはボランティア全般のあり方にも敷衍可能な意味内容を含むものと思われる。

ここで、障害者スポーツ研究ならびに障害者スポーツにおけるボランティア研究の動向について概観しておきたい。

わが国における、障害者スポーツに関する研究は、1970年代、身体障害者のスポーツ訓練⁹⁾、心身障害児(者)のリハビリテーションの研究¹⁰⁾等を契機として、主にリハビリテーション領域における障害者の身体・運動機能に対する理学・作業療法への運動療法の必要性³⁾、リハビリテーション体育のあり方^{8,30)}などの研究が行われた。それ以後、障害のタイプに応じた身体的、精神的に有効な運動内容の検討²⁹⁾や指導法⁹⁾などの研究が行われているが、これらは主に運動生理学、スポーツ医学、体育科教育学等からのアプローチであった。近年、これらの研究に加え、障害者スポーツを市民スポーツとして捉えた場合の問題点などを指摘した石原⁵⁾や、障害者のスポーツ・レクリエーション振興政策論を展開した大谷²⁰⁾、そして、障害者スポーツを地域におけるスポーツ振興の中でどのような形で展開していけるかについて「統合」をキーワードにその問題点や可能性に言及した藤田²⁾などの萌芽的研究がみられるようになってきている。

一方、スポーツボランティアに関する研究としては、ボランティア・スポーツ指導者に関しては、Weissら²⁸⁾や松尾ら^{12,15)}の研究が挙げられる。また、スポーツイベントに関しては、ボランティアの活動継続意欲を規定する要因に関するものとして綿ら²⁷⁾、山口ら³⁰⁾の研究、そして長ヶ原ら¹⁾の研究報告などがある。さらに、ボランティアの活動状況や意識に関連した調査研究としては、松尾¹³⁾による研究や工藤らの調査報告¹⁰⁾、内海らによる調査²⁶⁾等がある。これらの研究は、「する／受ける」の関係でいえば、いわば、「する」側に着目した研究であり、「受ける」側に着目した研究はほとんど見られない。

これらのことからわかるように、障害者スポーツ研究においては、スポーツボランティアに着目した研

究は、ほとんどなく、さらに、スポーツボランティア研究において、クライアント、いわば「受ける」側に立脚した研究は、ほとんどみられない。

しかしながら、近年、クライアントに着目することの重要性と具体的な課題を指摘する松尾¹⁰⁾の論考にみられるように、クライアント研究の重要性とその必要性は認知されつつあるともいえよう。クライアントに着目する主な意義としては、ボランティア側のみならず、クライアント側からみることで関係性の様相の特徴や形成過程における諸々のコンフリクトをより鮮明にみる事が可能となること、その結果、クライアント側に立ったクライアントとボランティアの新たな関係性のあり方が構想されることなどが挙げられよう。この意味で、このアプローチによって、スポーツボランティア研究において新しい領域を広げること寄与するのみならず、これらのことが明らかにされることによって、今後のボランティア養成に関わる資質の向上に寄与するものと思われる。

そこで本研究では、障害者スポーツにおけるボランティア活動におけるクライアント、いわばボランティア活動を「受ける」側に着目し、クライアントからみたスポーツボランティアに対する関係評価及び関係特性要因を把握するとともに、それらの結果について、社会的属性やスポーツ実施および意識から比較検討を行い、障害者スポーツにおける〈クライアントーボランティア〉関係の様相を明らかにすることを目的とする。

II. 分析枠組

ここでは、主に〈クライアントーボランティア〉関係のあり方に着目し、金子⁷⁾による関係性としてのボランティア論に依拠しつつ、分析枠組みを提示してみたい。

我が国における従来のボランティアイメージは、松尾¹⁰⁾よれば、「社会奉仕」、「滅私奉公」、「自己犠牲」というキーワードが示すように、自己を犠牲にして世のため、人のためにつくすというものであった。また、関係の取り結び方としても牧里¹¹⁾や三本松²¹⁾が指摘するように伝統的な農村社会に見られる血縁を媒介とした集団組織を土台に相互扶助を行うものや地縁を媒介とした町内会や婦人会などの居住の事実を契機に結束した集団組織を土台に相互扶助を行うものなど、血縁

や地縁に基づくボランティア活動が大半であり、いわば集団規範に基づくボランティアの考え方が中心であったといえよう。

それに対し、金子⁷⁾は、関係性の形成という観点から新たなボランティア論を展開している。金子によれば、ボランティアは「助ける」ことと「助けられる」ことが融合し、誰が与え誰が受け取っているのか区別することが重要ではないと思えるような、不思議な魅力にあふれた関係発見のプロセスであり、ボランティアとは、切実さをもって問題にかかわり、つながりをつけようと自ら動くことによって新しい価値を発見する人である。ここで重要なことは、ボランティアの提示する関係性、つまり、個人や社会への「かかわり方」と「つながりのつけ方」が、社会を多様で豊かなものにする、新しいものの見方と、新しい価値を発見するための人々の行動原理を提示するという点であり、この行為自体が社会の閉塞状況を打破するためのひとつの「窓」になると考える点である。

この視点からみれば金子も指摘するように、個人は、いわば「相互依存性のタペストリー」のなかで「他人の問題」を切り取らない、自らをその問題の一部として存在させることになるが、そのため、自らすすんでとった行動の結果として自分自身が苦しい立場に立たされるといふ、いわば自発性のパラドックスを抱え込むことになる。この自発性のパラドックスに身を投じることは、換言すれば自分自身をひ弱い立場に立たせることを意味し、つまりボランティアとは自ら動くことで自らをバルネラブルにすることであり、そこに他者との関係性を醸成する契機がある。

このことをスポーツボランティアに引き寄せて考えれば、スポーツボランティアは、障害者のスポーツ支援において自ら動き出すことで自らをバルネラブルとし、クライアントとの関係のなかで新しい価値の発見と両者の豊かな関係性を醸成するものと考えられる。しかしながら実際には、さまざまなコンフリクト、たとえば、支援技術の問題、する／受ける関係性、障害者／健常者の関係性に関するコンフリクトなどが存在するものと考えられる。

また、クライアントがスポーツボランティアと関係を持つということは、「相互依存のタペストリー」にクライアント自らが身を投じることを意味するが、その際、クライアントは、二重の意味でバルネラブルで

あると考えられる。すなわち、第一には、支援を受けること自体に関する暗黙知化された社会的関係性における低位意識性、第二には、スポーツ特性に関わるスポーツ技術レベルの低さに起因するバルネラブル性である。これらが、ボランティアに対する支援の頼みにくさや遠慮意識、特別視や特別扱いを受けている感覚となって表出するものと考えられる。また、その一方で、スポーツの特性に関わる身体的コミュニケーション性や遊戯性によって、ボランティアとの親密性は、他の領域のボランティアと比較して高まりやすいものとも考えられる。これらの点を作業仮説として検討を進めていくこととした。

以上、本研究では、関係性としてのボランティア論に依拠し、クライアントが単なる支援の受け手からボランティアとバルネラブル性を共有する豊かな関係性の醸成にむけて、どのようなコンフリクトやバルネラブル意識を有しているかを分析した上で、クライアント側から〈クライアントーボランティア〉関係の様相を検討してみたい。

Ⅲ. 研究の方法

1. 調査の概要

1) 調査対象

本研究では、1都3県（東京、山口、福岡、大分）、計5ヶ所の障害者スポーツ関係施設を利用する身体障害者を対象に質問紙を用いた社会調査を実施し、380名の回答を得た。

分析においては、スポーツ実施者に限定する目的で、「月に1～3日（年12～50日）」以上のスポーツ実施者のみ、計317名を分析対象とした。

各施設における、調査用紙回収数および分析対象数は以下のとおりである。

- ①大分県：障害者スポーツ関係施設A利用者70名
（分析対象48名）
- ②福岡県：障害者スポーツ関係施設B利用者100名
（分析対象87名）
- ③山口県：障害者スポーツ関係施設C利用者29名
（分析対象27名）
- ④a.東京都：障害者スポーツ関係施設D利用者131名
（分析対象113名）
- b.東京都：障害者スポーツ関係施設E利用者50名
（分析対象42名）

2) 調査方法

山口県、東京都の3つの施設に関しては、各施設に質問紙を郵送し、大分県、福岡県の2つの施設に関しては、調査員が施設に調査用紙を配布・説明した。その後、各施設において留置法により、調査対象者の同意を得た上で調査を実施した。

3) 調査期間

調査期間は、平成13年2月10日から3月20日である。

2. 質問項目構造および分析方法

1) 調査項目構造

(1) 社会的属性、スポーツ実施状況および意識について

性、年齢、スポーツクラブや同好会・チームへの所属の有無、および大会参加経験（競技レベル）、スポーツ志向性の5項目によって構成した。

なお、スポーツ志向性については、上杉のスポーツ価値意識の枠組み²³⁾を採用し、なかでも禁欲志向性（勝敗や技術の向上に関して禁欲的にスポーツに取り組む志向性）－即時志向性（自分の力に合わせて気軽にスポーツを楽しむ志向性）の軸によって項目を構成した。

(2) スポーツボランティアに対する関係評価および関係特性要因について

まずクライアントからみたスポーツボランティアの評価に関して、松尾¹⁴⁾のスケールを参考にしつつ、スポーツボランティアに対する不快な体験の有無とその内容、スポーツボランティアの接し方や態度に対する満足度、支援（サポート）能力の満足度の4項目を設定した。なお、満足度については、「非常に満足」から「非常に不満足」までの4件法で調査を実施した。

さらに、スポーツボランティアとの関係特性については、金子⁷⁾、松尾¹⁴⁾、藤田²⁴⁾らの〈クライアントーボランティア〉関係に関わる指摘を中心に10項目からなる項目群を設定した。

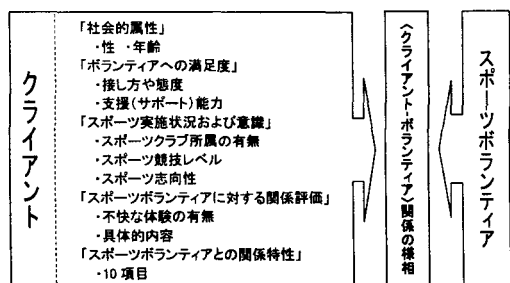


図1 調査枠組

2) 分析方法

本研究では、スポーツボランティアに対する関係評価および関係特性要因と社会的属性ならびにスポーツ実施状況および意識との関連をみるために主に次のような手順で分析を行った。

まずスポーツ実施状況に関して、①スポーツクラブや同好会・チームへの所属の有無については、「有」、「無」、②競技レベルにおいては、「全国レベルや国際レベルの大会参加経験者」、「地方レベルや施設内の大会参加経験者」、「大会非参加者」にそれぞれカテゴリーし、分析を行った。

また、スポーツボランティアに対する関係特性評価に関する要因については、それぞれの項目毎に「そう思う」から「そう思わない」までの4件法で調査を実施した。そして、それらの項目群について、探索的な因子分析によって関係特性因子を抽出し、社会的属性ならびにスポーツ実施状況および意識との比較分析を行うこととした。

なお回収された調査票は、SPSS for Windowsを用い、集計・分析を行った。分析の方法としては、比較対象に応じてカイ二乗検定、因子分析および分散分析の手法を用いた。

3) サンプル特性

まず性別では、男性69.4%、女性30.6%であった。また全体の平均年齢は、45.7歳（SD=15.3）であり、男性44.1歳（SD=15.6）、女性48.9歳（SD=13.9）であった。

現在のスポーツクラブや同好会・チームへの加入については、「加入している」人が64.4%、「加入していない」人は35.6%であった。競技レベルについては、「全国レベルや国際レベルの大会参加経験者」23.0%、「地方レベルや施設内の大会参加経験者」35.0%、「大会非参加者」42.0%であった。さらに、スポーツに対する志向性については、禁欲志向を有する人の割合が32.1%、即時志向を有する人の割合が67.9%であった。

IV. スポーツボランティアに対する関係評価および関係特性要因とその特徴

1. スポーツボランティアに対する関係評価

ここでは、クライアントからみたスポーツボランティアに対する関係評価に関して、スポーツボランティアに関する満足度の一般的傾向、スポーツボランティア

表1 スポーツボランティアに対する満足度 (%)

	接し方や態度	支援(サポート)能力
非常に満足	31.8	25.2
やや満足	59.9	62.4
やや不満足	7.9	12.0
非常に不満足	0.4	0.4
計	n=252	n=242

表2 クライアントのスポーツ実施状況及び意識からみたスポーツボランティアに対する関係評価 (%)

	カテゴリー	全体	クラブ加入		スポーツ競技レベル			スポーツ意識	
		n=247	有 n=174	無 n=73	国・国際 大会参加 n=71	地方・施 設内大会 参加 n=86	大会 非参加 n=90	禁欲 志向 n=85	即時 志向 n=157
不快な体験の有無	ある	37.2	41.4	27.4	42.3	47.7	23.3	48.2	30.6
	・よくある	4.0	4.6	2.7	4.2	5.8	2.2	9.4	1.3
	・何回か感じたことがある	27.1	30.5	19.2	33.8	32.6	16.7	37.6	21.0
	・一度だけある	6.1	6.3	5.5	4.2	9.3	4.4	1.2	8.3
	ない	62.8	58.6	72.6	57.7	52.3	76.7	51.8	69.4
	p		n.s.		p<.05			p<.001	
体験内容(複数回答)	・言葉づかいが悪かった	12.0	8.3	25.0	6.7	17.1	9.5	9.8	14.6
	・やって欲しいこと(期待していること)とやってもら内容が違っていた	34.8	34.7	35.0	36.7	39.0	23.8	39.0	31.3
	・ボランティアとしてやっているという横柄な態度や、なんとなく偉そうな態度がみられた	20.7	22.2	15.0	26.7	19.5	14.3	26.8	16.7
	・ボランティアの支援(サポート)の技術が十分ではなかった	30.4	30.6	30.0	36.7	29.3	23.8	34.1	29.2
	・何となく、頼みにくいことがあった	26.1	25.0	30.0	26.7	22.0	33.3	26.8	25.0
	・ボランティアの人自身が遠慮していたので、こちらへんに緊張したことがある	17.4	18.1	15.0	23.3	14.6	14.3	19.5	16.7
	・スポーツ大会などのとき、「ボランティアなのでわかりません」と言われて、こまったことがある	15.2	13.9	20.0	23.3	9.8	14.3	12.2	18.8
	・何となく特別視や特別あつかいされているような気がしたことがある	13.0	15.3	5.0	10.0	12.2	19.0	19.5	8.3
	・その他	6.5	5.6	10.0	6.7	9.8	—	7.3	6.3
	計	176.1	173.6	185.0	196.7	173.2	152.4	195.1	166.7
	n	92	72	20	30	41	21	41	48

に対する不快な体験の有無、およびその内容についてみておきたい。また、これらの結果を従属変数として、「クラブ加入の有無」、「競技レベル」等との関係を比較検討してみたい。

まず、スポーツボランティアの接し方や態度に対する満足度、支援(サポート)能力の満足度について聞いたところ、両項目ともに「満足(非常に満足+やや満足)」と回答した人の割合が8割を超えるなど一般的な満足度は、高い傾向にある(表1参照)。

しかしながら、スポーツを行う際、スポーツボランティアに対して、「困ったな」、「嫌だな」など不快な

体験をしたことがあるか聞いたところ、「よくある」4.0%、「何回か感じたことがある」27.1%、「一度だけある」6.1%と不快な体験を有する人の割合は約4割にのぼる。これは松尾¹⁴⁾の結果とほぼ同じ値を示している。この結果について、スポーツ競技レベル別比較において5%水準の危険率で有意差が認められ、たとえば、国レベルや国際レベルの大会参加者では、不快な体験を有する人の割合が42.3%に対し、大会非参加者では、その割合が23.3%であることからわかるように大会経験者ほど不快体験度の割合は高くなっている(表2参照)。

つぎに、その具体的内容について複数回答で聞いたところ、「やってほしいこと（期待していること）とやってもらう内容がちがっていた」と回答した人の割合が最も高く34.8%を占め、ついで「ボランティアの支援（サポート）の技術が十分ではなかった」30.4%、「なんとなく、頼みにくいことがあった」26.1%、「ボランティアしてやっているという横柄な態度や、なんとなくえらそうな態度がみられた」20.7%などの順となっている。

これらの結果は、従来、スポーツボランティアがア・プリオリに善いことであって、クライアントとの関係性についても良好であるかのように、もしくは、クライアントの意識は重視されてこなかったように思われるが、実際には、約4割の人がスポーツボランティアに対して不快な体験をしており、この結果は看過できない。またその内容についても、期待認知－役割認知の齟齬、支援技術の問題、両者の社会的位置関係に関する問題、態度問題など、多岐にわたる。これらの点についてはさらに後述したい。

2. クライアントからみたスポーツボランティアに対する関係特性要因およびその特徴

クライアントからみたスポーツボランティアに対する関係特性について、表3は、因子分析の結果を示したものである。固有値1.0以上の因子にバリマックス法による軸の直交回転を行ったところ、3因子が抽出

された。全体の累積寄与率は56.5%であった。抽出された因子については、それぞれの因子を構成する項目を勘案し、以下のように解釈・命名された。

まず、第1因子は、「スポーツボランティアとは、スポーツ以外でも個人的につきあうことが多い」(.821)、「スポーツボランティアとの日常でのつきあいがスポーツを楽しむ」(.817)など、スポーツボランティアとの親密性に関する項目から構成されており、「親密性因子」と命名された。

第2因子については、「スポーツボランティアと接していて、なんとなく優越感を感じることもある」(.839)、「スポーツボランティアと接していて、なんとなく劣等感を感じることもある」(.762)、「自分のスポーツ技術が下手なときは、ボランティアと一緒に運動・練習したくない」(.651)など、クライアントとスポーツボランティア間の社会的位置に関する項目群から構成されており、「社会的位置性因子」と命名された。

第3因子については、「サポート（支援）技術のない人が安易にスポーツボランティアを行うべきではない」(.749)、「スポーツボランティアは技術的にすぐれた人より、人間的にすぐれた人がいい」(.692)から構成されていた。これらの項目は、スポーツボランティアの技術に関連した項目群であることから「支援技術性因子」と命名された。

つぎに、それぞれの因子ごとに因子得点を算出し、

表3 クライアントからみたスポーツボランティア関係特性に関する因子分析(回転後の因子負荷行列)

		F1	F2	F3
1	スポーツボランティアとは、スポーツ以外でも個人的につきあうことが多い	.821		
2	スポーツボランティアとの日常でのつきあいがスポーツを楽しむ	.817		
3	スポーツボランティアの方が、他の生活場面におけるボランティアより親しみやすい	.590		
6	スポーツボランティアと接していて、なんとなく優越感を感じることもある		.839	
4	スポーツボランティアと接していて、なんとなく劣等感を感じたことがある		.762	
10	自分のスポーツ技術が下手なときは、ボランティアと一緒に運動・練習したくない		.651	
8	スポーツボランティアと親しくなるとついつい無理をお願いすることがある		.544	
9	サポート(支援)技術のない人が安易にスポーツボランティアを行うべきでない			.749
5	スポーツボランティアは技術的にすぐれた人より、人間的にすぐれた人がいい			.692
固有値		2.089	2.045	1.518
因子寄与率(%)		20.9	20.5	15.2
累積寄与率(%)		20.9	41.3	56.5

注)F1-F3に含まれなかった項目は記載していない

表4 スポーツボランティアに対する関係特性要因と関連項目の分散分析

	親密性因子	社会的位置性因子	支援技術性因子
性別	4.997 *	.016	.343
年代別	.327	2.475 *	.310
クラブ加入の有無別	8.892 **	.101	.324
スポーツ競技レベル別	4.690 **	1.449	.027
スポーツ志向性別	.538	5.792 **	.547

* p<.05 ** p<.01

分散分析を用いて社会的属性、スポーツ実施状況および意識関連項目との比較を示したものが表4である。

この表からもわかるように「支援技術性因子」に関しては、いずれの項目とも有意な差異は認められなかったが、「親密性因子」に関しては、性別、クラブ加入の有無別、競技レベル別においてそれぞれ5%~1%の危険率で有意差が認められた。性別における男性で、クラブ加入者で、そして競技レベルが高いほどスポーツボランティアに対する親密性を肯定する傾向が強くなっている。

つぎに、「社会的位置性因子」については、年代別、スポーツに対する志向性において、それぞれ5%および1%の危険率で有意差が認められ、年代が低いほど、そして禁欲的というより即時的な楽しみ志向の人において、社会的位置性に対する感覚や意識が強い傾向がみられる。

以上の結果から、クライアントからみたスポーツボランティアとの関係特性は主に、親密性、社会的位置性、支援技術性等の要因からとらえることができ、社会的属性やスポーツ実施および意識と個別に関連していることが確認された。

V. <クライアントーボランティア>関係の諸相

ここでは、クライアントからみたスポーツボランティアに対する関係評価と関係特性に関する因子分析及び分散分析の結果を<クライアントーボランティア>関係の様相という視点で検討してみたい。

今回の調査結果において、全体の約4割の人がスポーツボランティアに対する不快体験を有していたが、この数値は、上述したように決して低い数値ではなく、クライアント側に立ったスポーツボランティア論の再構築を求める結果ともいえよう。また、その内容は、多岐にわたっていたが、なかでも、「ボランティアの横柄な態度や偉そうな態度」を指摘している人の割合

が20.7%、「何となく特別視や特別あつかいされている気がしたことがある」と回答した人の割合が13.0%にのぼることは、スポーツボランティアを契機とした差別意識の醸成を示唆する結果として注目する必要がある。

つぎに、<クライアントーボランティア>関係の様相について、不快体験の内容と関係特性因子（親密性、社会的位置性、支援技術性）を主にスポーツ実施および意識と関連づけながら論じてみたい。

まず競技レベルが高く、クラブ加入者においては、不快体験があると回答した人の割合が高く、双方ともにスポーツボランティアとの親密性を評価する傾向がみられた。また、不快体験の内容については、双方ともに「支援（サポート）技術が不十分」と回答する割合が相対的に高くなっていた。

その一方で、大会非参加者、クラブ非加入者において、親密性に対する肯定的評価が相対的に低い傾向がみられた。また不快体験の内容については、双方ともに「なんとなく、頼みにくさがあった」、さらに大会非参加者において「特別視、特別あつかいされているような気がしたことがある」と回答する割合が相対的に高くなっていた。

この結果について換言すれば、クラブに加入し、競技レベルが高くなるとスポーツボランティアに対する理解と親密度が高くなり、不快体験の内容もボランティアとの社会的な位置性というより、むしろボランティアの支援技術に対する期待の高まりと不満が重視される傾向が看取されよう。その一方で、大会非参加者については、ボランティアとの親密性への評価の低さと相俟って、ボランティアの支援技術というより、社会的な位置性に関わる優位性や劣位性に対する関係性への意識が高く、この意識は禁欲的というより即時的にスポーツを楽しむ人においても高くなっていた。

これらの結果は、クライアントとスポーツボランティ

アの関係性の様相において、大会に参加することなく、即時的にスポーツを楽しもうとする場合、ボランティアに対する社会的位置性への感受性の強さと親密性の弱さが相互補完的に機能していること、その一方では、クラブ加入や大会への参加によってスポーツボランティアとの親密性が獲得されると同時にクライアント自身のスポーツ技術の高まりとも相俟って、優位性、劣位性に関わる社会的位置性へ眼差しは弱まり、むしろ支援技術性の意識が高まることを示唆するものと考えられる。

ここで重要な点は、社会的位置性への感受性と親密性との関係性の強さ、さらには社会的位置性への感受性とスポーツ技術の向上や競技レベルの向上との関係性の強さであり、障害者スポーツにおけるクライアントとボランティアの関係性の成立と様相の特徴を表すものともいえよう。

金子⁷⁾が、ボランティアを「相互依存性のタペストリー」のなかで、自ら動くことで自らをバルネラブルにすること、そこに他者との関係性を醸成する契機を読み込んでいることは上述した通りである。そこでは、クライアントは自ずとバルネラブルなものとしてとらえられているものと思われるが、その関係性の形成過程において両者のバルネラブル性を共有しつつ両者間の「親密性」をいかに構築するか、さらにスポーツにおいてはクライアント自らの障害のタイプやレベルに応じて、スポーツ技術の向上を含め、スポーツ的自立をいかに促すかが関係構築のうえで極めて重要だといえよう。

VI. 結果の要約と今後の課題

本研究では、障害者スポーツにおけるボランティア活動のクライアント、いわばボランティア活動を「受ける」側に着目し、＜クライアントーボランティア＞関係の様相について、不快体験の有無およびその内容と関係特性要因を社会的属性やスポーツ実施および意識から検討することが目的であった。この目的のために、障害者スポーツ施設を利用する身体障害者を対象に質問紙を用いた社会調査を実施し、月に1日以上スポーツ実施者317名を分析対象として検討を行った。

まず、スポーツボランティアに対する満足度は高かったものの、スポーツボランティアに対する不快な体験を有する人の割合は約4割にのぼり、大会経験者ほど

不快な体験を有する人の割合が高くなる傾向が示唆された。具体的内容としては、期待認知ー役割認知の齟齬、支援技術の低さ、両者の社会的関係に関する問題、態度問題など多岐にわたるが、なかでも「ボランティアの横柄な態度や偉そうな態度」、「特別視や特別あつかい」など両者の社会的関係に関する問題、態度問題については、スポーツボランティアを契機とした差別意識の醸成を示唆するものと推察された。

つぎに、スポーツボランティアに対する関係特性に関する因子分析の結果、3因子が抽出され、それぞれ、「親密性因子」、「社会的位置性因子」、「支援技術性因子」と命名された。各因子と社会的属性、スポーツ実施および意識関連項目との比較において、「親密性因子」については、男性、クラブ加入者、そして競技大会経験者でスポーツボランティアに対する親密性を肯定する傾向が強く、「社会的位置性因子」では、年代が低く、即時的な楽しみ志向において社会的位置性に対して敏感である傾向が示唆された。

また、これらの結果について＜クライアントーボランティア＞関係の様相という視点で検討したところ、クライアントのスポーツ技術、競技レベル、クラブの加入等と親密性、社会的位置性、支援技術性との関連性が注目された。すなわち、大会非参加者で、即時的にスポーツを楽しもうとする人の場合、ボランティアに対する社会的位置性への感受性の強さと親密性の弱さが相互補完的に機能している可能性があること、その一方では、クラブ加入や大会への参加によってスポーツボランティアとの親密性が獲得されると同時にクライアント自身のスポーツ技術の高まりとも相俟って、優位性、劣位性に関わる社会的位置性への眼差しは弱まり、むしろ支援技術性への意識が高まることが示唆された。

今後の課題と関連して、本研究では、主にクライアントとボランティアの関係性におけるクライアントの暗黙知化された社会的属性、ならびにスポーツの諸特性と両者間の親密性の形成過程に着目したことから、クライアントの障害のタイプや症例別からみた詳細な検討は行わなかった。クライアントやボランティアの性格特性のタイプによる関係形成も含め、今後、クライアントとボランティアの関係性の様相に関するより詳細な検討が要請されよう。

さらに、クライアント、いわばボランティア活動を

「受ける」側とスポーツボランティアの関係成立過程のダイナミズムとそのメカニズムを明らかにしていく必要がある。

注

注1) ここでは障害者・児の概念と定義について、「年齢や社会環境からして、家族、社会的・教育的・職業的統合の目的にとって、また、人権の効果的享受にとって、かなりの不利が生じ、さしつかえがあると見なされるような、身体的にせよ精神的にせよ、恒久的もしくは長期化した機能障害に苦しめられている人」¹⁸⁾と把握したい。

注2) スポーツボランティアとは、「報酬を目的とせずに自分の能力、技術、時間を提供して地域社会や個人・団体のスポーツ推進のために行う活動のことを意味する。ただし、活動にかかる交通費等、実費程度の金額の支払いは報酬に含めない。」²⁰⁾ものとして捉える。

注3) 上杉はスポーツ価値意識をスポーツ行動の諸局面における価値判断の総体として捉え、「禁欲一即時」志向と「世俗一遊戯」志向の2つの基準軸を基にしたスポーツ価値意識パターンの四類型を提示している²⁰⁾。

参考・引用文献

- 1) 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春男・菊池秀雄, スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2), 鹿屋体育大学研究紀要, 第6号, pp.69-76, 1991.
- 2) 藤田紀昭, 障害者と地域スポーツ, 体育の科学, 第50巻3号, pp.213-217, 杏林書院, 2000.
- 3) 東 俊郎, 体育のリハビリテーション的役割, 体育の科学, 第22巻9号, pp.569-572, 杏林書院, 1972.
- 4) 広田博子, 身体障害者のスポーツ訓練, 体育の科学, 第22巻9号, pp.609-612, 杏林書院, 1972.
- 5) 石原俊樹, 障害者のスポーツを考える, 体育の科学, 第36巻1号, pp.23-28, 杏林書院, 1986.
- 6) 石川尚子, 盲学校の実態と体育, 体育の科学, 第31巻7号, pp.471-476, 杏林書院, 1981.
- 7) 金子郁容, ボランティア もうひとつの情報社会, pp.1-113, 岩波新書, 1992.
- 8) 河野信弘, 「リハビリテーション体育」の構想と内容, 体育の科学, 第22巻9号, 杏林書院, pp.576-579, 1972.
- 9) 経済企画庁国民生活局, 平成12年度 国民生活選好度調査, pp.7-8, 財務省印刷局, 2001.
- 10) 工藤保子, スポーツボランティアに関する調査研究, 日本体育学会第46回大会号, p.205, 1995.
- 11) 牧里毎治, 地域福祉の構成要件と地域福祉計画, 右田紀久恵・高田真治共編 地域福祉講座①, pp.279-281, 中央法規出版, 1986.
- 12) 松尾哲矢, 少年スポーツのボランティア指導者におけるドロップアウトに関する日米比較研究, レジャー・レクリエーション研究, 第35巻3号, pp.10-20, 1996.
- 13) 松尾哲矢, スポーツボランティア活動参与の規定要因に関する実証的研究, 福岡大学体育研究, 第28巻2号, pp.33-51, 1998.
- 14) 松尾哲矢, スポーツボランティアの原則と今後の課題, コーチング・クリニック, vol.11, No 9, pp.78-80, 日本体育社, 1997.
- 15) 松尾哲矢・多々納秀雄・大谷善博・山本教人, ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会学的研究, 体育学研究, 第39巻3号, pp.163-175, 1994.
- 16) 村地俊二, 心身障害児(者)のリハビリテーション, 体育の科学, 第22巻9号, pp.588-593, 杏林書院, 1972.
- 17) 内閣府政府広報室, 体力・スポーツ, 世論調査, 第33巻4号, pp.50-58, 財務省印刷局, 2001.
- 18) 中野善達, 国際連合と障害者問題, エンパワメント研究所, p.24, 1997.
- 19) 岡堂哲雄編, 社会心理用語辞典, pp.8-9, 至文堂, 1982.
- 20) 大谷善博・谷口勇一, 障害者の生涯スポーツ・レクリエーションーその実態と振興方策ー, 厨 義弘監修, 大谷善博・三本松正敏編, 生涯スポーツの社会学, pp.111-128, (株)学術図書出版社, 1997.
- 21) 三本松正敏, 地域福祉とボランティア, 現代のエスプリ321, 至文堂, pp.42-52, 1994.
- 22) 総務庁統計局, 平成8年 社会生活基本調査報告 第4巻(その1), pp.640-641, (財)日本統計協会, 1998.

- 23) 総理府編, 障害者白書 平成12年度版, p.291, 大蔵省印刷局, 2000.
- 24) SSF笹川スポーツ財団, スポーツ白書－Sport for AllからSport for Everyoneへ, p.98, SSF笹川スポーツ財団, 2001.
- 25) 上杉正幸, スポーツ価値意識のパターンとその規定要因に関する研究, 昭和62・63・平成元年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書, pp.2-4, 1990.
- 26) 内海佳子・荒井貞光・谷口勇一・東川安雄, スポーツボランティアの参加意識に関する調査研究, 日本体育学会第46回大会号, p.205, 1995.
- 27) 綿裕二・野川春男・山口泰雄・菊池秀雄, スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続意欲に関する研究, レクリエーション研究19, pp.48-49, 1989.
- 28) Weiss, M.R.・Sisley, B.L., Where Have All the Coaches Gone?, *Sociology of Sport Journal* 1, pp.332-347, 1984.
- 29) 矢部京之助, 障害者体育の確率にむけて, *体育の科学*, 第31巻7号, pp.446-451, 杏林書院, 1981.
- 30) 山口泰雄・菊池秀雄・野川春男, スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続要因の分析, *日本体育学会第40回大会号*, p.158, 1989.
- 31) 山川 純, これからの体育とリハビリテーション, *体育の科学*, 第22巻9号, pp.573-575, 杏林書院, 1972.